

# 平成26年度 現職教育研究概要

相馬市立日立木小学校

## 1 研究主題設定の理由

「望ましい集団活動を通して、よりよい人間関係を築き、考えを持って活動する子どもの育成」  
～充実した学級づくりを基盤とした学級活動(1)の指導のあり方～

- 『思考力』『判断力』『表現力』を育成するために、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語環境を整え、言語活動の充実を図ることに配慮することが求められている。
- 子どもたちの生活の中で大きな位置を占めているのは「人間関係」である。楽しく豊かな学級生活づくりのために、「互いに尊重し、よさを認め合えるような人間関係（親和的な学級集団）」を育てることが大切になってくる。
- 教育目標を受けた本年度の重点目標「自分の考えをもち 伝え合う子ども」の達成のために、特別活動を充実させ、主体的な話し合いを通して、互いに自分の考えを表現し伝え合うことができる児童を育てたいと考える。
- 1学年1学級で、6年間クラスも変わることなく生活しているため、学級間に固定化された交友関係や力関係が存在したり、それに流され、意見が一極化したりする傾向もある。また、教師の目が届きやすく、指示する局面も増え、子どもたちにも指示待ち的な傾向が見られる。

これらのことから、特別活動における「話し合い活動の充実」に視点をあて研究を進め、自分の考えを出し合い、話し合い、認め合う学級・集団の育成をしたいと考え、本主題を設定した。

## 2 めざす児童像

	低学年	中学年	高学年
よりよい人間関係を築く子ども	友だちと仲良く活動できる	友だちのよさを認め、力を合わせて活動する	みんなで話し合う中で、自他のよさが分かり、高め合うことができる
考えを持って活動する子ども	友だちの意見をよく聞き、自分の意見を言える	他の考えも認め、自分の考えを理由を明確にして言える	自分の考えを踏まえ、活動が活発になるように、集団の一員としての考えをもつことができる

## 3 研究仮説

子ども一人ひとりのよさを認め合い、よりよい人間関係を築くために、以下の手だてを講じれば、考えをもって活動する子どもたちが育つであろう。

- 手立て1 児童の発意、発想を大切に話し合い活動を設定する。(学級会)
- 手立て2 学級生活の充実と向上を図るための支援に心がける。(係)
- 手立て3 児童が自主的、自発的に取り組むための支援を工夫する。(集会)

## 4 研究の内容

- (1) 学級活動(1)(2)の内容の精選
- (2) 係活動の見直し
  - ・活動環境の充実
- (3) 発達段階に応じた指導の目安の作成
  - ※ めざす児童像とリンクさせて
- (4) 話し合いの仕方の指導
  - ・話し合いの進め方(マニュアル) ・意見カード
- (5) 話し合いの条件の整備
  - ・めあての精選 ・議題の設定 ・計画委員の指導
- (6) 子どもの創意工夫を取り入れた集会活動の実施
  - ・経験値を上げる指導
- (7) 特別活動における評価方法……指導と評価の一体化
  - ・評価規準の作成

- 第2年次（平成26年度）の研究
  - ① 話し合い活動の進化をめざした研究
    - ・ 発達段階に応じた、話し合いのマニュアルの作成
    - ・ 折り合いのつけ方について
    - ・ 必要感を持たせた議題の設定
    - ・ 発達段階を踏まえた系統的なめやすの設定
  - ② 教師の力量を高める研修
  - ③ 小教研第2次研究協議会での授業公開

## 5 授業実践

### 実践1 第2学年

#### 授業テーマ

少人数で意見を交流することで自分の考えを明らかにし、一人一人が話し合いに参加することができる授業

『議題名 わくわくスポーツ大会をしよう』

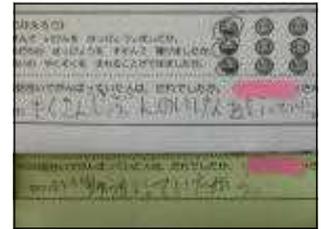
#### 【友だちの意見をよく聞き、自分の意見を言える子ども】

手だて① 自信をもって発言するための工夫

- ◎ 学級会ノートの活用

学級会ノートに自分の意見を書くことで、自分の考えを明確にさせた。また、その理由なども書ける範囲で書かせることで、自分の考えを整理し、自信をもって発表できるようにした。

また、「ふりかえり」で、話し合いでがんばっていた友達を評価する項目を設け、よい意見を発表したりたくさん意見を述べたりした友達を賞賛する場をつくった。それをくり返すことにより、自分の意見に自信をもって発言できる子どもが育つと考えた。



手だて② 少人数での交流の場の設定

- ◎ 2～3人による話し合い

進んで発表するのが苦手な児童でも、少人数であれば自分の意見が言える。座席をもとに2～3人の小グループ（バディと呼んでいる。少人数の場での個々の意見の出し合いを目的にしているので、小グループのメンバー構成は意図を持って行っていない。）を組んでおき、困ったときは話し合えるようにした。

- ◎ 個々の意見の吸い上げ

小グループで出たつぶやきの中でよい意見を、小グループの意見として採り上げることで、個々の意見の吸い上げにつなげた。

- ◎ 友だちの考えを参考に

よい考えが浮かばなかったり意見が定まらなかったりしたときに、友達の意見を聞くことでそれを参考にし、自分の考えをまとめていけるようにした。

#### 【友だちと仲良く活動できる子ども】

手だて③ 子どもたちの手による実践化

- ◎ 条件整備や準備の時間の設定

話し合いによって決定したことを自分たちの手で実践化できるようにするために、実践のための条件を子どもたちに示すようにした。子どもたちは、その条件下でできることを話し合ったので、スムーズに実践につなげることができた。また、子どもたちが期待に胸をふくらませ楽しんで準備できるように、子どもたちの意見を尊重しつつ、準備のための時間や環境設定をするようにした。そして、実践化につなげることで、友達と協力して活動する楽しさや充実感を体験させることができた。

### 実践2 第4学年

#### 授業テーマ

話し合いの中で、相手の良さを認める場面を効果的に活用することで、望ましい人間関係を作ることができる授業

『議題名 係活動をパワーアップさせよう』

【友だちのよさを認め、力を合わせて活動する子ども】

手だて① 友だちのよさを認める場面の効果的な活用

- ◎ スキルアップを図る活動を取り入れる。

本時では「ハッピー・サンキュー・ナイス」を取り入れ、話し合いに入る前に友達の良いところを認め合う活動を取り入れた。また、本時まで朝の活動や道徳の時間など「相手を尊重したコミュニケーションスキル」「相手理解のための言葉・表現スキル」がアップできるようなソーシャルスキルや活動を取り入れた。

- ◎ 話し合いの形態を工夫する。

机を使用しないで、円になって話し合いをすることで、友だちとの間隔が近くなり話しやすい環境を作った。また、移動しやすくなるので、グループによる話し合いや活動がスムーズにできた。全体では認めてもらえない考えも少人数の中では認めてもらえたり、話し合い活動の中でも考えを合わせ協力したりという活動の場面が見られると考えた。

【他の考えも認め、自分の考えを理由を明確にして言える子ども】

手だて② 考えを明確にして話し合いに臨むための工夫

- ◎ 事前に資料を掲示する。

係活動について「反省・困っていること・がんばっていること」など個人の反省を付箋に書いて係ごとに画用紙に貼った。それを他の係の子が見られるように学級会コーナーに掲示しておいた。係の反省を見て、活発な活動学級が楽しくなるための活動にするためのアイデアを事前に学級会ノートに書いて、自分の考えを明確しておいた。また、時間があるのでその理由まで考えて臨むことができた。

- ◎ 議題の選定を工夫する。

自己中心的な言動をしてしまう子どもがいるので、折り合いを付けて一つの考えに絞る話し合いではなく、困っている係にみんなでアイデアを出し合うという話し合いになる議題を選定した。さらに「良い活動を残す」「学校をよりよくするアイデアを出す」ことを条件にすることで、友達の意見を否定しないで認めることができ、出し合ったアイデアから係が選択することで、認めてもらえた喜びを感じることができると考えた。



実践3 第6学年

授業テーマ

話し合いの中で、一人一人が考えを持ち、それぞれの意見の良さを認め合いながら主体的に解決していこうとする児童を育成する授業

『議題名 ポプラっ子祭を成功させよう』

【みんなで話し合う中で、自他のよさが分かり、高め合うことができる子ども】

手だて① 考えを明確にして話し合いが深められるようにするための板書の工夫

- ◎ ホワイトボードの活用

意見をホワイトボードの短冊に書き込むことで、板書の見やすさ・効率化を図るようにした。画用紙の短冊を使うよりも書きやすく、内容によってペンの色を変えるなど、視覚に訴えることができると考えた。

また、黒板書記の児童でも簡単に意見の集約ができるようになることも意図している

- ◎ 本時では、事前に考えた内容をさらに良くするための工夫について話し合わせた。折り合いをつけるのではなく、アイデアを出し合うことで友だちの意見を認め、比較検討しながら話し合いが進められると考えた。



【自分の考えを踏まえ、活動が活発になるように、集団の一員としての考えを持つ子ども】

手だて② 最適なタイミングで議題を設定する

- ◎ 学校行事との関連

児童の生活に寄り添うことを考えると、学校行事との関連がとても大きい。年間の行事を掲示するなど見通しを持たせることで、今だから話し合いたいという気持ちを高めることができると考えた。

◎ 6年生としての自覚を高める

今回は「ポプラっ子祭を成功させるために6年生である自分たちだからできること」を議題設定の理由に取り上げた。学校のリーダーであることを自覚し、学校全体を盛り上げるためにどんなことができるかを真剣に考えることができると考えた。

**実践4** 第3学年

授業テーマ

1年生に楽しんでもらう集会というねらいを明確にし、1年生の立場に立って合意形成をする場を設定することによって、ねらいに即して意見を述べ合ったり協力し合ったりしながら、主体的に集会活動を作ろうとする授業

『活動名 1年生とわくわく集会をひらこう』

【友だちのよさを認め、力を合わせて活動する子ども】

手だて① 全員で役割を分担し、関わり合って活動するための工夫

◎ 目標の明確化と主体性の喚起

本活動でこだわったことの一つに、「全員が達成感を得られるように役割を分担する」ということがある。今までの授業や特別活動を振り返ると、児童の役割に軽重があり、中にはほとんど何もやっていない児童がでてしまうことがあった。そこで、今回は、「1年生を楽しませる」という明確な目的を示し、そのためには全員が精一杯の仕事をして集会を成功させることが必要であると繰り返し伝えた。また、教師が可能な限り手を出さないことも明確に伝えた。その結果、児童の「自分達で会を作ろう」という意識が高まり、自分達でどんどん仕事を見つけ、全員が忙しく汗をかきながら活動していた。教師が平等に仕事を割り振ろうというのではなく、児童が自ら精一杯の役割を果たすことができていた。

【他の考えも認め、自分の考えを、理由を明確にして言える子ども】

手だて② 主体的に話し合うための工夫

◎ 児童が必要に応じて話し合うための仕掛け

- 1 目的を明確にする。
- 2 複数の方法を計画させたり、教師が事前に提示したりしておくが、決定はさせない。
- 3 教師が決定のプロセスに口出しをしない。

その結果、授業者が把握できただけでも、次のような話合いが行われていた

1 障害物走における話合い

- (1) フラフープの数が足りなかったため、数を増やすかどうか、誰が取って来るかを決めた。
- (2) 泣いている1年生に声をかけるため、スタート係の子が他の子と役割を入れ替えた。
- (3) ゴム跳びのゴムの高さを変えた。
- (4) 怖がっている1年生男子をどう助けるかを相談し、伴走者を決めた
- (5) 泣いている1年生女子に今後参加できるかどうかを聞き、1年担任に「次の種目は参加できると言っている。」と報告した。
- (6) 平均台から落ちた1年生がいた為、平均台にカラーコーンを置き、ゆっくり渡るように促した。

2 ドッジボールにおける話合い

- (1) 外野・内野は誰にするか。
- (2) ジャンプボールを誰がやるか。
- (3) 勝敗の決め方の意見の相違（1年生からの意義）はどうするか。
- (4) 判定の相違をどうするか。

3 進行上の話合い

- (1) 事前に決めた役割以外の仕事（座らせる、集合させるなど）を誰がやるか。

- (2) 各種目の終了時刻をどうするか。
- (3) 種目を2つで終わるか、3つ目までいけるか。

特に1-(6)に関しては、授業者は心底驚かされた。教師の常識的な判断であれば、「走らないようにしよう。」「ゆっくり渡ろう。」と指導するところである。または、マットを敷くという判断もあるだろう。しかし、児童の感覚ではそうではないのだ。平均台を急いで渡りたいという1年生の挑戦心を尊重し、更に難しい設定にしながらも安全性を高めるという方法を考えたのである。

## 実践5 第5学年

### 授業テーマ

必要感のある議題を設定し相手意識を高めることで、話し合いの中で友達の意見の良さを認め合い、創意工夫した活動内容を活発に話し合おうとする授業

### 『議題名 スマイル交流会の計画を立てよう パート2』

#### 【みんなで話し合う中で、自他のよさが分かり、高め合うことができる子ども】

手だて① 友達の考えや良さを認め合う児童を育むための工夫

- ◎ 事前に内容を決め、少人数で話し合いをさせる。

本時では、事前に考えた内容をさらに良くするための工夫について話し合わせた。折り合いをつけるのではなく、それぞれのグループや全体でアイデアを出し合う話し合いの形をとることで友だちの考えを認め、比較検討しながら話し合いが進められるのではないかと考えた。また、少人数による話し合いの時間を取り入れることによって、みんなの前では積極的に発言できなかつたり、発言力のある児童に押され、言いたいことが言えなかつたりする児童が少しでも発言しやすくなるのではないかと考えた。

#### 【自分の考えを踏まえ、活動が活発になるように、集団の一員としての考えを持つ子ども】

手だて② 相手意識を高めるための工夫

- ◎ 相馬養護学校との連携

本活動において、児童一人一人が「Sくんのために」と相手意識をはっきりとをもって話し合いに臨めるように、次のようなことを行った。

- 1 第一回の交流を振り返る
- 2 Sくんの1日の学校生活の様子を映像に撮ってもらい、児童に見せる。

特に2に関しては、Sくんの養護学校での様子だけでなく、Sくんに関わる教員の声かけの仕方なども知ることができた。

## 実践6 第1学年

### 授業テーマ

話し合いの議題に沿って意見を発表したり、賛成や反対など意思表示をしたりすることで、一人一人が話し合いに参加し、集団決定することができる授業

### 『議題名 1年生なかよし集会をしよう』

#### 【友だちの意見をよく聞き、自分の意見を言える子ども】

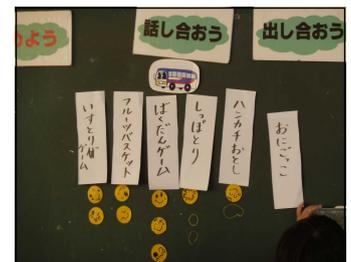
手だて① やってみたいことを提示し、互いの意見を交流する

- ◎ ホワイトボードの活用

事前に2・3年生に「楽しかった集会活動」をインタビューした内容と、それをもとにやってみたいことを短冊に書き、ホワイトボードに掲示した。話し合いでやりたいことを「出し合う」場面でスムーズに意見を出すことができるようにした。

- ◎ 話し合いの「材料」の提示

経験の少ない1年生が、想像だけで話し合うのは難しいと考えた。実演やビデオなどでゲームの内容を紹介し、話し合うための材料とした。



手だて② 少人数での交流の場の設定

- ◎ 2～3人による話し合い

進んで発表するのが苦手な児童でも、少人数であれば自分の意見が言える。場を車座に

し、意見を交流しやすくした。

◎ 計画委員の関わり

意見が出なかったり話合いの流れが滞ったりした場合に少人数での話合いを取り入れる。計画委員も話合いに加わり、どんな意見が出ているのかを知り把握する。意図的な指名など全体での話合いに生かすことができるようにした。

◎ 自分の立場を明確に

話合いの段階にバスの絵を進行させることで論点がずれずに話し合えるようにした。板書構成で賛成(黄色の○)、反対(青の▲)を数で把握できるようにした。

### 【友だちと仲良く活動できる子ども】

手だて③ 子どもたちの手による実践化

◎ 条件整備や準備の時間の設定

3年生に招待された集会を想起し、どんな係が必要か考え、実践できるようにした。上学年との交流をすることで経験の少なさを補えるようにした。

◎ 学級目標との関連化を図る。

提案理由に学級目標「みんなが楽しいクラス」「最後までがんばるクラス」を入れることで話合いだけでなく、実践の振り返りに生かせると考えた。

## 6 成果と課題

### 発達段階に応じた、話合いのマニュアルの作成について

- マニュアルを活用した話合いを続けた結果、徐々に必要とせずに行進できる児童が増えている。また、話合いに小グループでの話合いを積極的に取り入れたところ、普段は意見を出せない児童も、積極的に発表が行えた。話合い方の一つとして、小グループでの話合い⇒全体での話合い、という流れが本校児童に定着しつつある。
- 小グループの話合いにおいて、一部の児童の意見が通ってしまうケースが見られた。グループ構成の工夫やルールの確立など、今後も研究を進めていきたい。

### 折り合いのつけ方について

- 話合いの目的(提案理由を含めて)が明確になっていると、児童相互がそれぞれの良さを生かしながら、折り合いをつけて話し合えることが確認できた。また、考えを一つに絞る、という話合いだけではなく、たくさんのアイディアを出し合い、それぞれの良さを認めるような話合いを行うことで、友達の良さを認め、積極的に活用しようとする話合い活動が展開されるようになった。
- 意見のまとめ方を学ぶために、他学年の話合いを参観したり、良い決め方の事例を蓄積したりする、といった案が出されたが、まだ実行できていない。教師が主導するのではなく、児童が主体的に折り合いの付け方を学ぶ工夫を考えていきたい。

### 必要感を持たせた議題の設定について

- 必要感を高め、積極的な話合いを促す手立てとして、学級外とのつながり(他学年や他校児童と交流等)が有効であると分かった。本校のような小規模校の場合、安易な同調や予定調和的な話合いになりがちであるが、学級外とのつながりを持つことで、しっかりと話し合わなくてはならないという必要感に迫られることが分かった。
- 必要感を高めるためには、話し合う時期の見極めが重要であることが分かった。集会や行事に関わる話合いの場合、実施日の3～4週間程度の時間を設けることで、児童は試行錯誤しようとする意欲が湧き、積極的に話合いを行うことができた。
- 議題設定の理由を工夫することで、児童がより相手意識・目的意識を持って話し合えるのではないか、という意見が出された。今年度の研究を通して、議題設定の理由の大切さが確認されたので、より適切な議題設定の在り方について研究が必要だろう。

### 発達段階を踏まえた系統的なめやすの設定

- 過去の研究と振り返り、児童に着けたい力を整理して、指導と評価規準の一覧表を作成した。研究を進めるにあたって、「どう話し合うか」だけではなく、「どんな力を着けるために話合いに取り組ませるのか」をはっきりさせることで、教師が必要な手立てを考えやすくなった。
- 今年度は評価規準を十分に活用できなかった面がある。適切な支援を行うために、授業のねらいと指導・評価を繋げて研究を進めていきたい。